

川越 宏文(かわごえ ひろふみ)先生のプロフィール

東京女子医科大学付属東洋医学研究所、
けいめい記念病院東洋医学研究所所長 等を経て、
現職は、ちぐさ東洋クリニック 院長

専門科目：内科・アレルギー科・心療内科・漢方婦人科・漢方小児科・漢方皮膚科

- * 冷え症・子宝外来
- * 花粉症体質改善外来
- * アレルギー外来 アトピー・喘息外来
- * 虚弱児対策外来



◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

久留米大学を卒業時、地元の宮崎医科大学の第1内科に入局。
卒後3年目で腎臓内科医として勤務していた病院で、激しい咳嗽の止まらない透析患者に
麦門冬湯を用いて奏功したことです。

その患者様は様々な治療をしたにもかかわらず全く反応しなかったその咳嗽が漢方薬で
ぴたりと止まったのです。

うれしさ反面、どうしてこんな良い薬を知らなかったのだろうという悔しさもありました。
その後、いい気になって数人に使用、奏功を得ましたが、5人目の患者様には
全く効果がなく、「やっぱり漢方は・・・？」と思ったとき、
担当MR氏から一冊の本をいただきました。

それが『漢方診療医典』。その本から、漢方には証というモノが存在することや、
それまで疑問を抱えたままの患者(研修医時代・元々体温が低い患者が
36.5度で解熱剤を出してほしいと来院した例)に関するもやもやが解消されました。

その後、どんどん漢方の勉強を初め徐々にのめり込みました。
漢方を処方するには、患者のいろいろな話をお伺いする必要がありますよね。

病室で担当の患者様といろいろ話していると、担当以外の患者からも様々な相談を
受けてしまうことが・・・。どうもこれが当時の直属の上司の被害妄想をかき立てたようで、
研究室の上司から「先生は患者の話を聞きすぎる！」と叱責されました。

患者様の話を聞かない医者になることがどうしても理解できなかった私は、
宮崎医大に見切りをつけ東京で漢方の修行をする決心がつけました。

自分にとって運がついていたのは、東京女子医大の代田教授の講演会が
宮崎市内で行われたこと。必死に自分を売り込んで代田教授と飲んでいる内に、
「それなら見学にこい」という約束を取り付けました。

どうにかこうにか3日間の見学をすることができ、女子医大での生活がスタートしました。臨月の妻と2歳半の息子を残して東京へ異動したのが3月31日、新宿での外来は4月1日からでした。

◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

女子医大時代は東洋医学教育についての研究が楽しかったです。当時は、今のように東洋医学教育が注目されていませんでした。

医学教育学会でも、「色物扱い」でしたが、しつこく研究しました。

現在すべての医学部で行われている東洋医学教育も私が調査し、10年前の医学教育学会誌に掲載された論文では25%程度でした。

その時から、東洋医学教育のスキルについては、様々なアイデアを持っていましたが、現在大学を離れた関係で親交のあった他の大学の先生方にヒントを与えて、勧めてもらっています。日大では少しずつモノになってきたようです。

◆普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

基本的に漢方で治したいのですが。。。まれに漢方を用いていない方もいらっしゃいます。

また、最近、へたくそながらも鍼灸治療や刺絡などを行い始めました。こちらの方は結果が数秒間で出ますので、おもしろいというか・・・。

おかげで、噂を聞きつけた患者様が車で数時間かけて来られ始めています。大学での恩師・代田教授からは「湯液と鍼灸は車の両輪」と教えられていましたし、日産玉川病院時代の光藤先生との話をよく聞かされていたので、私自身は刺絡やお灸に対して、あまり抵抗がないのですが・・・。

そちらの方がうまくなりすぎると漢方薬の効きが悪くなりそうで少し心配です。

◆10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

当然、10年といわず、100年、1000年先まで漢方医学という医療システムは残さなければなりません。ただし、東洋医学教育の影響などで漢方薬の使われ方もさらに多様化してくると思われます。

それはそれで必要なことなのかと思いますが、日本漢方の基本となる「医師と患者様との空気感覚」についてはきちんと伝えていってほしいと思います。優れた医療文化である漢方医学を世界に発信すると共に、基本的なもつとも大事な部分についてはきちんと温存する必要があります。



◆先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なされたことがありますか

以前、黄連解毒湯を飲んで体調が悪くなったことがあります。
自分では実証かもと期待していたのですが……。

なかなか自分を診断することは難しいようです。

◆これから漢方医を志す方に一言お願いします

以前、寺師先生が漢方入門者向けの本としてお勧めになった本が、再販されました。
黒田 亮著 『勘の研究』です。
漢方医としての素養を身につけるにはもってこいと思われれます。

漢方医に必要なのはEBMよりも研ぎ澄まされた「勘」です。

◆漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

医者選びも治療のうちです。

保養の道は、みずから病を慎むのみならず、又、医をよくよらぶべし。天下にもかへがたき父母の身、わが身を以て、庸医の手にゆだぬるはあやうし。医の良拙をしらずして、父母子孫の病する時に、庸医にゆだぬるは、不孝・不滋に比す。「おやにつかふる者も亦、医をしずんばあるべからず」。といへる程子の言、むべなり。医をえらぶには、わが身、医療に達せずとも、医術の大意をしれば、医の好・否をしるべし。たとへば書画を能くせざる人も筆法をならひ知れば、書画の巧拙をしるが如し。

貝原益軒著 『養生訓』 択医

◆座右の銘、お好きな言葉などありましたら教えてください

他は是れ吾れにあらず 道元著 『典座教訓』



注意:先生へのインタビューは、経歴以外、当会が2007年7月に行った内容です。